

## 元刊本『臨濟録』の構成と価値

邢 東風

臨濟義玄(？―八六六)は臨濟宗の祖師であり、『臨濟録』はその語録の略称である。歴史上、『臨濟録』は中国から日本へ広く伝わり、深い影響を及ぼし、その伝本も写本・刊本・集合本・単行本・注釈付きの鈔本など様々な形態を呈している。最初の刊本は宋元時代に出現し、現在知られるテキストには次の三種類がある。第一は北宋宣和年間の宗演本、第二は南宋咸淳年間の刊本(実は『古尊宿語録』の一部)、第三は元代の雪堂普仁の重刊本(「元刊本」或いは「雪堂本」とも呼ばれる)。これらの刊本はいずれも『臨濟録』の伝本史における重要なものであるが、宗演本は古くから逸失し、南宋本は複数の伝存があるが、元刊本についてはその現存およびその内容が確認されていなかったため、宋元刊本、特に単行本『臨濟録』の面目は、『臨濟録』の伝本史において一つの謎であった。

筆者は二〇一六年五月花園大学で開催された「『臨濟録』国際学会」出席をきっかけに、日本伝本によって元刊本『臨濟録』の原型を推測したが、その後さらに調査を進め、元刊本の現存を確認することができた。それは中国国家図書館所蔵『臨濟慧照玄公大宗師語録』一巻であり、現在は天下唯一の伝本で、文物としての価値と研究資料としての価値を兼ね持つ貴重なテキストである。本論文はこの元刊本の内容を紹介し

ながら、関連する問題をも検討したい。

## 一、元刊本の現状と伝存過程

中国国家図書館所蔵『臨濟慧照玄公大宗師語録』は、元の雪堂普仁によって刊行されたものであるが、現存本は完全本ではなく、書首に欠落のページがある。現存本の書首は、表紙・トップページ・「普秀序」の三つの部分が存するが、元来のものは「普秀序」のみであり、他の二部分、また全書各ページの裏打ちされた紙は修補の時に新たに付けられたものである。現存本は以下の部分によって構成されている。

1. 表紙 黄裳よる手書きの題記。

元板臨濟慧照玄公大宗師語録 袁寒雲舊藏 庚寅新正黄裳題

2. トップページ 小燕よる手書きの跋文と鈐印。

此元板元印本臨濟慧照玄公大宗師語録、袁寒雲故物、後入南林劉氏嘉業堂、劉氏書散、余收之市肆者也。中土已為無第二帙、而日本翻雕甚多。五山板中、是本間出、然往往變易舊式、不足取也。曾見室町中期所刊一本、大題後一行已後書慧然集、而于臨濟上別加鎮州字樣、如非此祖本尚存、何以知其割裂舊式耶？壬辰五月十六日閒窗展卷書 小燕 黄裳百嘉

黄裳の題記は一九五〇年に記し、小燕の題跋は一九五二年に書かれた。以上は修補の際に加えた新紙で、以下は元刊本の旧紙である。

3. 「臨濟慧照玄公大宗師語録序」 五峰普秀撰  
現存本では唯一の序文である。二葉、半葉九行、一行二〇字。第一葉以下に以下の印記がある。

〔黄裳鑑藏〕

〔寒雲秘笈珍藏之印〕

〔曾經南林劉翰怡收藏〕

〔黄裳珍藏圖書印記〕

序文の末尾には原版の題記がある。

吳中小生錢良佑敬書

4. 『臨濟慧照玄公大宗師語録』

『臨濟録』の本文である。全て三八葉、半葉一〇行、一行二〇字。第一―二四葉は臨濟の「上堂」と「示衆」、第二四―三〇葉は「勘辨」、第三〇―三八葉は「行録」である。最初に書名と編者名と印記がある。

臨濟慧照玄公大宗師語録

住三聖嗣法小師惠然集

〔黄裳藏本〕

〔北京圖書館藏〕

〔黄裳容氏珍藏圖籍〕

〔黄裳〕

末尾には下記の題記がある。

住鎮州保壽嗣法小師延沼謹書

ここで注意すべきことは、「住大名府興化嗣法小師存獎校勘」の題記がないことで、これは宋版『臨濟録』と異なっている。

以下は本書の付録である。全て一一葉、半葉九行、一行一七字。内容は下記のとおり。

5. 「大名臨濟慧照玄公大宗師碑記」、郭天錫撰

6. 「臨濟慧照玄公大宗師真贊」、郭天錫撰

7. 「真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘」、王博文撰

8. 刊板人署名

これは元刊本の製版事業の寄付者リストであり、全で一葉半、半葉一一行。

なお、最後のページの枠外には、黄裳よる手書きの題記がある。

黄裳珍儲元至元古刻和尚語録

同ページには、三つの印記があり、一つは澄心堂であるが、他の二印は弁識しがたい。

以上は現存本の構成である。次にその伝存過程と関連人物について検討してみよう。

本書は近代以前、いかなる伝存の経過があったかは未詳であるが、近代以降の伝存過程は書中の題記と印記によって分かる。即ち、最初は袁寒雲の所有、後は劉氏嘉業堂の収蔵、次は小燕の購入、最後は北京図書館（現在の国家図書館）の収蔵という経過であった。袁寒雲（一八八九—一九三一）は、袁世凱の次男、名は克文、号は寒雲である。彼は古錢幣に精通し、宋元版の書籍をも収蔵した。「寒雲秘笈珍藏之印」は本書が袁克文の所有であったことを証する。嘉業堂主は劉承幹（一八八二—一九六三）、字は貞一、号は翰怡、浙江省の富商で、蔵書を好み、一九二四年「嘉業堂」という蔵書楼を建て、蔵書数は五〇万冊にも上った。のち嘉業堂の蔵書の多くは浙江省図書館の所有となったが、他に流失したものもある。「曾經南林劉翰怡收蔵」の印記は、本書がかつて嘉業堂の収蔵であったことを証する。今、『嘉業堂藏書志』を見ると<sup>(1)</sup>、本書の蔵書記録がある。

慧照玄公語録一冊 元刻本

僧惠然集。玄公即普仁、號雪堂、臨濟十八世孫、闡臨濟之精言。前有普秀序、錢良祐書。後有郭天錫記及真贊、又有王博文撰碑、商挺題額、皆元初名人、後有杭州刊板名氏（以下省略——引者）。

右記の記述は、繆荃孫氏が一九一七—一九年の間に記録したものである。これによって、本書は遅くと

も一九一九年までに嘉業堂に入ったこと、および書首は当初から既に欠落していたこと(後述)が分かる。また繆氏は「玄公」が雪堂普仁を指すと誤解したため、本書を普仁の語録とした。「玄公」は臨済義玄のことで、本書はまさに彼の語録にほかならない。黄裳(一九一九―二〇二二)は著名な作家・新聞記者・戯劇家であって、小燕は彼の夫人である。夫婦二人は数万冊の蔵書を持ち、所蔵の珍本には二人の題記がよく見られるという。今、題記によれば、少なくとも一九五〇年代初期まで、本書は黄裳夫婦の所有であったことが分かる。のち北京図書館に入ったのがいつ頃のことかは分からないが、一九八七年編集の『北京図書館古籍善本書目』には本書の記録が見えるので、本書は遅くとも一九八〇年代中期までに、既に北京図書館の所有となったのは疑いない。

小燕は「本書は天下の孤本であり、日本の五山版『臨済録』の祖本でもあるが、しかし日本刊本は原本を変えた個所があるため価値が低い」と指摘している。彼女の言う五山版とは室町中期の刊本を指し、具体的には永享九年(一四三七)刊本を言う可能性が高い。永享本は室町中期に刊行された五山版の一種であり、現在日本においては複数の伝存がある。さらに『大正蔵』第四七冊所収の『臨済録』は永享本を底本としたもので、比較的に入しやすい。この永享本を元刊本と対照してみると、永享本は『臨済録』の書名を「鎮州臨済慧照禪師語録」とし、編者を「慧然集」としているが、元刊本の書名には「鎮州」の二字がなく、編者は「惠然集」である。こうした相違に鑑み、小燕は「五山版は既に祖本を『割裂』したため、『取るに足りない』」と言ったのであるが、しかし五山版の祖本は恐らく宋元の刊本を両方ともに採用しており、しかも日本伝本の中には元刊本の序跋を保存しているため、日本伝本は特殊な価値を持っていると言うべきである。また黄裳は書尾の題記に、本書を「元至元古刻和尚語録」としているが、本書は「至元古刻」ではなく、大徳年間の刊本であり、また「和尚語録」は漠然とした言い方であるが、実は臨済義玄の

語録である。

以上の題記と印記、および以前の蔵書記録は、本書の伝存過程と関係人物を把握するために重要な手がかりを提供しているが、しかしその中には、誤ったものがあるので、参考にする際には注意しなければならない。

元刊本の『臨濟録』の本文は、南宋本(『古尊宿語録』)と同じもので、元刊本の特有のものではないため、ここで検討しない。元刊本特有のものは臨濟の語録本文以外の部分にあるので、以下にこれを検討しよう。

## 二、普秀序

現存元刊本の序文は、普秀の「臨濟慧照玄公大宗師語録序」のみである。この序は日本の伝本にも見られる。一つは『鎮州臨濟惠照禪師語録鈔』(以下『鈔』と略称)で<sup>(2)</sup>、また一つは『大正蔵』第四七册所収永享本『臨濟録』(以下『大正蔵』本)と略称)である。但し、元刊本のこの序文は日本の伝本より四〇余字多く、また破庵先・石田薰・愚極慧・玉山珍・仏照光・澗翁琰・偃溪聞・雲峰高・天童鑑・雪峰聳・柏林璋・定林秀・廓然安など十数人の僧名が、日本の刊本には見えない。こうしたことによって、日本の伝本は元刊本の内容を遺漏した箇所があることが分かる。しかし日本の伝本には元刊本を訂正した箇所もあり、例えば「雪堂乃吾三世」の後ろに「祖」の一字を加え、これによってこの句の意味が通ずる。しかし元刊本が普秀序の原型に最も近いものであることは間違いない。以下はその原文である。

### 臨濟慧照玄公大宗師語錄序

竊以黃巖山高、便敢當頭捋虎、溇陀岸遠、亦能順水操舟、既露惡毒爪牙、仍顯慈悲手段。攔腮一掌、免煩著齒粘唇、劈肋三拳、可謂傾心吐膽。三玄在手、七事隨身、觸之則石裂崖崩、擬之則雷轟電掣。門庭孤峻、闊奧宏深、只可望崖、不可趣向。茲者總統雪堂和尚、憫巴歌唱而和寡、嗟雪曲彈而應稀、語錄闕文、叢林罕見、遂旁求釋子、而再起斯文、欲鏤板以廣流通、俾參玄而得受用、弘揚祖道、垂裕後昆。棒頭喝下、須明石火電光、正案傍提、要顧眉毛鼻孔。其它機緣、備載前錄、不勞再舉。噫！臨濟祖師、六傳而至汾陽大宗師、汾陽下傑出六大尊者、曰慈明圓、曰琅琊覺。慈明圓傳陽岐會、會傳白雲端、端傳五祖演、演傳佛果勤·佛鑑·天目齊、佛果勤傳虎丘隆·大慧杲、虎丘隆傳應庵華、華傳密庵傑、傑傳破庵先·松源嶽、破庵先傳石田薰、薰傳淨慈愚極慧、松源嶽傳無德通、通傳虛舟度、度傳徑山虎岩伏·靈隱玉山珍。大慧杲傳佛照光、光傳澗翁琰、琰傳偃溪聞、聞傳雲峰高·天童鑑·雪峰聳、天目齊傳汝州和、和傳竹林寶、寶傳竹林安、安傳竹林海、海傳慶壽璋·白澗一·歸雲宣、慶壽璋傳海雲宗師·竹林彝、海雲宗師傳可庵朗·龍宮玉·蹟庵儂、可庵傳太傳劉文貞公·慶壽滿、龍宮玉傳大名海、蹟庵傳慶壽安、竹林彝傳龍華惠、白澗一傳沖虛叻·懶牧歸、歸雲宣傳平山亮、亮傳柏林璋·定林秀。琅琊覺傳渤潭月、月傳毘陵真、真傳白水白、白傳天寧黨、黨傳慈照純、純傳鄭州寶、寶傳竹林藏·慶壽亨·少林鑑、慶壽亨傳東平汴·太原昭·廓然安、少林鑑傳法王通、通傳安閑覺、覺傳南京智·西庵贊、南京智傳壽峰湛、西庵贊傳雪堂仁、雪堂乃臨濟十八世孫也。莫不門庭孤峻、機辯縱橫、俱是克家子孫、燈燈續焰、直至如今、可謂源清流長、此之謂也。雪堂乃吾三世、囑予為序、率爾書之、腦後見腮、頂門具眼者、大發一笑。開泰退堂襲祖第二十世孫五峰普秀齋沐焚香拜序。

吳中小生錢良佑敬書

この序文は、まず、「臨濟の禪法は非常に激烈なものだが、実は慈悲心から出たものであり、人々を開悟に導くためのものである。彼の法門は奥深いので、人々は遠くから眺めることはできるが、近づき難いように見える。雪堂普仁は臨濟の禪法が難解すぎて理解できる人が少ないことを心配し、さらに当時は『臨濟録』さえもなかなか目にするのができなかったため、この本を新たに刊行し流布させたいと願ったのである」と語っている。続いて、臨濟祖師から雪堂普仁までの伝承の系譜を述べているが、普仁は臨濟第一八代の孫弟子であること、臨濟宗が長い歴史と伝承を持つことを述べている。最後に、作者の普秀自身は雪堂普仁の三世の孫弟子であり、この序文は普仁の依頼によって作成したものであると言っている。普秀の伝記は史伝に見えないが、この序文によれば、彼は雪堂普仁の孫弟子であることが分かる。彼には「梵網經菩薩戒序」という著作があり、ここでも雪堂普仁のことに言及している。

この序文の作成年代について、陸川堆雲氏は「元、至元時代、西暦一三六〇頃」としているが<sup>(3)</sup>、実際はそれほど遅くはなかったと思われる。なぜなら序文には、「雪堂禪師が私に序文を作ることを委嘱した(雪堂……嘱予為序)」と明言しており、作者は普仁の孫弟子として、大先生の依頼を長い間放置したとは考えにくいからである。さらに、元刊本にはこの「普秀序」の他、「從倫序」と「郭天錫序」があり、三序は共に普仁の依頼によって作成されたものである。そのうち「郭天錫序」は大徳二年(一二九八)に書かれているので、「普秀序」とさほど離れてはいないであろう。

「吳中小生錢良佑敬書」の題記によって、この序文は錢良佑が書写したものと分かる。錢良佑(一二七八—一三四四)、字は翼之、蘇州の人。「江村先生」と呼ばれ、元代の著名な書家である。彼は篆・隸・真・行・小草など各種の字体に精通し、勅命によって『農桑輯要』・『大学衍義』などを書写したことがある<sup>(4)</sup>。錢氏の墨蹟は現在も伝わっているが、この序文はこれまでに知られなかった彼のもう一つの書作品である。



この序文のポイントは、臨濟宗の伝承の系譜を述べている点にある。作者の意図は普仁の法脈の源流を説明しようとする点にあったことは明らかで、そのうち、金元時代の伝承の記述が特に詳しい、例えば、天目齊系統の白澗一・帰雲宣・冲虚昉・懶牧帰・平山亮・竹林彝・龍華惠・龍宮玉・大名海・柏林璋・定林秀と、琅瑯覺系統の天寧党・慈照純・鄭州宝・慶寿亨・竹林蔵・少林鑑・東平汴・太原昭・廓然安・法王通・安閑覺・南京智・西庵贊・寿峰湛などの人物は、いずれも金元時代北方臨濟宗の僧であるが、しかし彼らについては禪宗史書の記載が極めて少なく、或いは記載があつても間違っている。今はこの系譜によつて、他の史料に散見するこれらの人物の臨濟宗伝承系統における位置を確定することがはじめてできるのである。したがつて、この序文は金元時代臨濟宗の研究において貴重な史料的价值を有するのである。

### 三、郭天錫の逸文

本書の付録には郭天錫の二文がある。一つは「大名臨濟慧照玄公大宗師碑記」（以下「碑記」と略称）、もう一つは「臨濟玄公大宗師真贊」（以下「真贊」と略称）で、この二文は他の文献に見えず、特に貴重なものであるためここに移録しておく。

#### 大名臨濟慧照玄公大宗師碑記

千金之子、擅山海富、必有契券為之守。三軍之帥、擁金革衆、必有鐵鉞為之權。萬乘之國、居社稷重、必有寶玉為之鎮。蓋其託於物者專、故其傳於時者遠也。惟大雄氏則不然、爰自西夏、流教諸華、

本本水源、枝行派接、至于今茲、為人天之所瞻仰、為國王大臣之所崇敬、為居士長者・凡夫外道之所嚮慕、是非有寶玉之鎮・鐵鉞之權・契券之守之託也、而其傳之遠、雖百千萬世未可知、得非其所托者不惟其物、而惟其人乎？傳之可以遠、託之得其人、未有如臨濟宗之盛者也。臨濟者、曹州南華邢氏子、黃檗蓮禪師之嗣、南嶽讓禪師之四世孫、名義玄、諡慧照、塔曰澄靈、其所住鎮州道場曰臨濟、世遂稱之曰臨濟宗。蓋自南嶽以來、他宗莫與抗。師自幼負志出塵、落髮受具、便參禪宗于黃檗會中、親受提警、奪鑿栽松、種種悟解、往來大愚・潯仰間、印證圓成、黃檗遂舉其師百丈禪板・几案授之。及其住臨濟也、正聲雷行、學侶雲集、趙州・龍牙、雖致座下、乃師法叔之行、諸方晚出、深以不得受鉞為恨。其所成就、自寶壽沼・三聖而下二十有二人、皆嶄然露頭角、稱其家兒。而興化獎公禪師、獨能壽其傳、今之稱臨濟宗者、皆興化嗣也。師示滅于大名興化寺之東堂、說傳法偈四句云、「法流不止問如何、真照無邊說向他。離相離名還自稟、吹毛用了急須磨。」偈畢、竟以正法眼藏付三聖然、實唐咸通八年歲丁亥四月十日也。闍毘、乞得舍利無數、分塔為二、一曰大名、一曰真定。懿宗與之謚、賜之名、平生金章玉句、如「三玄三要」、「奪境奪人」等語、無慮數十則、天下學子、至今藉為入道之門、而其法嗣又所至能闡揚其宗風。自興化獎而下、四世至汾陽昭禪師、其上足曰慈明圓、曰琅琊覺。慈明圓四傳而至佛果勤・佛鑑・天目齊。佛果傳虎丘隆・大慧杲<sup>5)</sup>。虎丘隆三傳至破庵先・松源嶽。破庵先傳石田薰、薰傳淨慈愚極慧、松源嶽傳無德通。通傳虛舟度、度傳徑山虎岩伏、靈隱玉山珍。大慧杲四傳至雲峰高・天童鑑、雪峰聳。天目齊四傳至竹林海、海傳慶壽璋・白澗一・歸雲宣。慶壽璋傳海雲宗師・竹林彝。海雲宗師傳可庵朗・龍宮玉・蹟庵僊。竹林彝傳龍華惠。白澗一傳冲虛昉・懶牧歸。歸雲宣傳平山亮、亮傳柏林璋・定林秀。可庵傳太傅劉文貞公・慶壽滿。龍宮玉傳大名海、蹟庵傳慶壽安。琅琊覺六傳而至鄭州寶、寶傳竹林藏・慶壽亨・少林鑑。慶壽亨傳東平汴・太原昭・廓然安。少林鑑傳法王

通、通傳安閑覺、覺傳南京智・西安贊。智傳壽峰湛、贊傳雪堂仁。雪堂乃臨濟嫡後之孫也、國王大臣無不敬之以禮、皇兄晋王后妃公主駙馬、各賜金錦法衣。茲來東南方、且擇名山勝地、稱述慧照道德、樹石刻書、傳示永久。由咸通至今七丁亥、四百二十載、由臨濟至雪堂十有八傳、而燈燈相續、心心相照、口口相授、如坐一堂、如臥一席、如經一刹那頃、等無有異、是豈非所托以傳者惟其人乎？而況水龍陸象、諸有力人、世世生生、為之護持正法、則其傳雖百千萬世、未可知也。至元丁亥九月、前監察御史北山居士郭天錫記。

### 臨濟玄公大宗師真贊

這阿師、太奇絕、狀貌堂堂如古月。親從黃檗山中來、又要大愚重喋喋。三尺殺人刀、殺人須見血、倒提正令行諸方、把斷諸方不容說。機鋒巖峻似難當、就裡婆心元太切。西瞿耶尼、北鬱單越、香滿乾坤開五葉。雲門曹洞非無人、近代兒孫頗消歇。君不見天南天北臨濟燈、萬古光明長不滅。北山居士郭天錫盥手焚香拜贊

この「碑記」はまず、臨濟宗の伝承は外在的権威に頼らず、適切な伝承者によってはじめて脈々と続いてきたと述べている。続いて、臨濟義玄の生涯を紹介したうえで、臨濟の法脈の伝承系譜を述べる。作者は一方で興化存獎の重要な役割を強調し、他方では慈明楚円と琅琊慧覺との両系統の伝承の系譜を記述しており、系譜の内容は普秀序の記述と殆ど変わらない。最後にこの「碑記」の撰述理由を説明している。当時、雪堂普仁は臨濟義玄の法要を伝えるために、「大名臨濟慧照玄公大宗師碑」の建立と『臨濟録』の刊行とを計画し、よって郭氏にこの「碑記」の執筆を依頼した。この「碑記」と王博文の「碑銘」によって、当

初雪堂普仁は大名(現在の河北省大名県)の興化寺と真定(現在の河北省正定市)の臨濟寺にそれぞれ臨濟祖師の記念碑を建てたことが分かる。郭氏の「碑記」は、その碑石は既に失われたが、その碑文は幸いに元刊本の中に保存され、今再び見ることができるようになった。

「真贊」は臨濟義玄の画像のために書いた賛であり、「臨濟の禅法は非常に激しいが、実は彼の心には慈悲が満ちており、また当時、臨濟の法は広く行われているのに比べ、雲門宗と曹洞宗は比較的寂しい状況にある」と述べている。

「碑記」は至元二十四年(一二八七)に撰述されたことによって、雪堂普仁が当時すでに『臨濟録』の旧本を入手していたことが分かる。また作者の署名は「前監察御史北山居士郭天錫」とあり、当時彼は監察御史の職を既に辞していたことも分かる。郭天錫について、以前彼は郭昇と混同されたことがあるが<sup>(6)</sup>、実は、元代には二人の「郭天錫」がいたのである。一人は名前が郭天錫(一二二七—一三〇二)で、字は祐之、号は北山、金城(現在の山西省応県)の人。元代初期の有名な書画收藏家であり、かつて監察御史となり、至元二十二年(一二八五)以降、杭州に移住して、自ら「北山居士」と号した。もう一人は名前が郭昇(一二三〇—一三五五)、字は天錫、号は思退、丹徒(現在の江蘇省鎮江)の人で、元代後期の有名な書画家である<sup>(7)</sup>。大徳二年(一二九八)、郭天錫は元刊本『臨濟録』のために、「臨濟慧照玄公大宗師語録序」を撰し、今日本の伝本に見ることができると述べている。この序と「碑記」と「真贊」はまさに金城郭天錫の著述で、いずれも元刊本によって保存された彼の逸文である。

#### 四、王博文の「碑銘」

この碑銘の全称は「真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘」(以下「碑銘」と略称)。王博文が雪堂普仁の依頼によって、真定臨濟寺の「臨濟道行碑」のために書いた碑文であるが、元刊本の付録として伝わったものである。この「碑銘」は、日本の伝本にも見られる。一つは前にあげた『鈔』であり、もう一つは元禄十一年(一六九八)刊本の『臨濟語録摘葉鈔』(以下『摘葉鈔』と略称)、もう一つは享保十二年(一七二七)刊本の『鎮州臨濟慧照禪師語録』である<sup>(8)</sup>。この三本のうち、享保本は新印本があるために比較的に見やすい。実は日本の伝本は元刊本より数十字少なく、元刊本こそがこの「碑銘」の完全な原型である。一九八〇年代、日本の臨濟宗訪中団の紹介によって、中国ではじめてこの「碑銘」が知られ、数年前に正定臨濟寺がこの碑銘を再び刻んで碑石を建てたのであるが、残念ながら所用の底本は日本の伝本であって、当時は信用度の高い元刊本の存在が知られていなかったためである。以下は元刊本の王博文の碑銘である。

#### 真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘

正議大夫御史中丞行御史臺事 王博文 撰并書

通奉大夫參知政事樞密副使 商挺 題額

佛氏之祖、由毘婆尸七世至釋迦牟尼、嗣釋迦之法者、迦葉尊者為第一祖。由迦葉二十八傳而得達磨。達磨至中國為初祖、傳至大鑑、大鑑號曹溪、始派別為五。大鑑傳南嶽讓、讓傳馬祖一、一傳百丈海、海傳黃檗運、運傳臨濟、此臨濟一宗相傳授之大概也。師諱義玄、姓邢氏、曹之南華人。性穎異、以孝聞鄉里、幼喜佛氏之學、既落髮受具、即留心于經論、窮幽探蹟。既而曰、「此濟世之醫方也、非教外別傳

之旨。」遂從事于禪宗、參黃檗運禪師、證據提警、意融心會、引伸觸長、種種解悟、而又切嗟于大愚・潯山間、以至道業純一、復出儕輩、黃檗遂以其師百丈之禪板・几案授焉。唐宣宗大中八年、行脚至真定、住子城東南臨濟院。以其近于潯陀之津渡、遂以臨濟自名。後太尉墨君和捨宅為寺、迎師居之、亦號臨濟焉。師道價既高、當時聞人勝士、咸來嚮慕、無間遠邇、問法求道、肩摩踵接。普化・克符二上座、乃師法叔行也、以雄傑相與輔翼、而甘處下風焉。其善知識如龍牙・洛浦・麻谷・鳳林、皆炷香數具、願執弟子禮、但得一言半句發藥者、即成令器。既而往河中、府主王常侍延以師禮。住持未幾、杖錫歸大名、居興化寺之東堂。一日攝衣據座、與三聖然公問答、即以正法眼藏授之、而說偈曰、「源流不止問如何、真照無邊說向他。離相離名還自稟、吹毛用了急須磨。」說此偈竟、端然而逝、實懿宗咸通八年四月十日也。茶毘所得舍利、其徒分而為二、一塔于魏府、一塔于鎮陽。詔諡曰「慧照禪師」、扁其塔曰「澄靈」、子孫相繼主之。金國兵興、寺為焦土、唯塔獨存、歸然于瓦礫中。大定二十三年、世宗夜夢師乞徙塔于淨域、遣使視之、果為糞壤蕪穢所埋擁。使還以聞、世宗命官吏率高行師德董其役、距故址進二十步、樹磚浮圖九級、藏舍利焉。皇朝撫有方夏、為主僧所居、殿宇荒摧。海雲大宗師、臨濟之十七世孫也。監寺定明、白府致禮請海雲主是席。丙午春、復為十方禪寺、命其嗣子庵主通公、慵庵堅公、可庵朗公相繼住持。殿宇佛像莊嚴完好、皆海雲之力也。師傳授之法、曰「三玄三要、賓主料揀、四喝八棒」之屬、洪規深旨、為天下學者入道之門、皆師之所自得、非授之于黃檗也。嗣師之法者、若子若孫、為龍為象、不可殫紀。其大略則由興化獎而下、四世而至汾陽昭、其上足曰慈明圓、曰琅瑯覺。慈明圓傳楊岐會、會傳白雲端、端傳五祖演、演傳佛果勤・佛鑑・天目齊。佛果傳虎丘隆・大慧杲。隆傳應庵華、華傳密庵傑、傑傳破庵先・松源嶽、先傳石田薰、薰傳淨慈愚極慧、岳傳無德通、通傳虛舟度、度傳虎岩伏・玉山珍。大慧傳佛照光、光傳溈翁琰、琰傳偃溪聞、聞傳雲峰高・天童鑑・雪峰聳。天目

齊傳汝州和、和傳竹林寶、寶傳竹林安、安傳竹林海、海傳慶壽璋・白潤一・歸雲宣。璋傳海雲宗師・竹林彝。海雲傳可庵朗・龍宮玉・隕庵儂。朗傳太傅劉文貞公、玉傳大名海、儂傳慶壽安。竹林彝傳龍華惠、白潤一傳冲虚昉・懶牧歸。歸雲宣傳平山亮、亮傳柏林璋・定林秀。琅琊覺傳泐潭月、月傳毘陵真、真傳白水白、白傳天宁黨、黨傳慈照純、純傳鄭州寶、寶傳竹林藏・慶壽亨・少林鑑。亨傳東平泮・太原昭・廓然安。鑑傳法王通、通傳安閑覺、覺傳南京智・西庵贊。智傳壽峰湛、贊傳雪堂仁、由臨濟十八世矣。至元丁亥秋八月、雪堂齋聖上御香、將詣杭湖諸名利焚修祝釐、至廣陵、來謁予言、「僧今年春過鎮陽、拜臨濟祖師塔、撫循遺跡、旌紀寂寥、因與僧統滿公議、將以師之道行刻之貞石、以詔學者、幸公為我當筆也。」予固辭、不許、即相與考證諸家傳錄、以次第之。謂雪堂曰、「自曹溪派而為五之後、今法眼・滄仰傳者至少、雲門・洞下差多于二家、唯臨濟一宗演溢盛大。既為嗣法高弟、發明師之宗旨、昭揭師之學行、俾傳無窮、宜矣。」仍系之以銘曰、

達磨至中國、傳佛法與心。

無言語文字、直超向上尋。

神光最堅篤、雪立不厭深。

豁然悟本體、提印開未今。

六祖派為五、同鐘而異音。

四傳得黃檗、黃檗傳臨濟。

臨濟何雄偉、龍象真可擬。

饜頭下承機、虎須邊悟旨。

剷除諸相妄、洞徹萬物理。

每與學者云、馳求漫勞耳。  
得真正見解、佛祖不遠矣。  
只于赤肉團、有無位真人。  
十方與三界、在汝屋與身。  
持求唯自信、殊勝自相親。  
一棒與一喝、機鋒若然新。  
盲癩莫漫來、鵝王食乳真。  
雷驚師子吼、魔魅俱消淪。  
耆宿善知識、蜂附而蟻聚。  
門人與高弟、龍騫而鳳翥。  
付却正法眼、徑歸兜率去。  
曹溪唯此脈、如海百川赴。  
一燈發千燈、散為萬寶炬。  
神光照十方、不在舍利數。  
高名傳萬古、不在澄靈固。  
骨朽舍利塵、自在不亡住。  
書此刻貞珉、庶俾後學諭。

年月日立石大功徳主

前江淮福建等處釋教總統十八世孫雪堂野衲 普仁 立石



杭州淨慈寺住持龔祖傳法十七世孫愚極 至慧  
杭州靈隱寺住持龔祖傳法十八世孫玉山 德珍  
杭州徑山寺住持龔祖傳法十八世孫虎岩 淨伏

撰者の王博文(一二三三―一二八八)は、字は子冕、号は西溪。東魯の人であるが、彰徳(現在の河南省安陽)に移住した。早くにフビライ大王に任用され、後に蒙古の憲宗にしたがつて南征し、河東山西道提刑按察使・礼部尚書・大名路総管・江南道行御史台中丞などを歴任した。碑額の書者である商挺(一二〇九―一二八九)は、字は孟卿、曹州濟陰(現在の山東省滄沢)の人。フビライ時期の大臣、参知政事・安西王相・枢密副使などを歴任した。彼の伝記は『元史』卷一五九に見える。王・商の二人とも雪堂普仁との交際があり、故に臨濟記念碑の建造事業に参与したのである。

この「碑銘」の内容と背景については、既に学者よる論考があるので<sup>9)</sup>、ここでは簡単な紹介と補足説明だけを行う。

「碑銘」はまず達磨から臨濟義玄に至るまでの伝承の系譜、臨濟の修行の経歴、臨濟舍利塔の建立、および金代の再建などを述べている。最も注目すべきところは、臨濟遷化の後、魏府(現在の河北省大名県)の興化寺と鎮陽(現在の河北省正定)の臨濟寺においてそれぞれ舍利塔が建てられ、そして金の世宗の時代に臨濟寺の舍利塔が再建されたことである。

続いて海雲印簡とその弟子たちが臨濟寺に住持したこと、臨濟の独自の禅法、興化存獎から元代初期に至る臨濟宗の伝承の系譜などを記述している。「海雲碑」を参照すれば、海雲が臨濟寺に住持したのは一二三五年のことで、最初に臨濟寺の監寺たる定明和尚が鎮陽史帥の史天沢(一二〇二―一二七五)に申請

し、史天沢が朝廷に上奏し、このようにしてはじめて海雲を臨濟寺に招くことができた。海雲は着任すると、臨濟寺の修復を行った。一二四六年、臨濟寺は再び十方禪寺に改められ、海雲は弟子の庵至堅公・備庵堅公・可庵朗公などを相次いで住持に抜擢した。庵至堅公は、「海雲碑」にいう「真定維摩福通」のことで、備庵堅公は「海雲碑」にいう「備庵至堅」或いは「臨濟志堅」のことである。近年、正定で発見された「寓庵堅公禪師壽塔」は<sup>10)</sup>、備庵至堅塔の可能性が高く、これによって彼は至元四年(一二六七)まで臨濟寺にいたことが分かる。

この「碑銘」の撰述について、碑文によれば、至元二十四年(一二八七)秋八月、雪堂普仁が杭州へ名刹の参詣に行く途中、広陵(現在の江蘇省揚州市)を経由した際、王博文に碑文の執筆を依頼し、王博文は「諸家の伝録を考証した」上で、この「碑銘」を書いたという。同年の九月、郭天錫の「碑記」は既に完成していた。両碑文に記述された臨濟宗の伝承の系譜はほぼ同じであることから、王博文の「考証」は、郭氏の「碑記」を参考にした可能性がある。

立碑の年代について、ある学者は、至元二十四年(一二八七)、或いはもう少し遅れると推測しているが<sup>11)</sup>、しかし普仁は碑石の落款で「前江淮福建等處釋教總統」と自称しており、当時彼はこの職を既に解任されていた。普仁は至元三十年(一二九三)に「江淮福建隆興等處釋教總統」に任命され<sup>12)</sup>、彼の「釋教總統」着任から解任までには恐らく数年間が経過したものと思われ、したがって立碑の年代は、至元三十年以降、つまり一二九〇年代の中後期であった可能性が大きい。

この「碑銘」は、普秀の序と郭氏の「碑記」と共に、興化存獎以下の臨濟宗の伝承の系譜を詳細に記録しており、内容もほぼ同じであるが、この系譜は一体誰の創作であろうか。王博文は「諸家の伝録を考証した」と自ら称しているので、この系譜は彼が最初に創作した印象を与えるが、実際には彼の「考証」は郭

天錫より遅かったのであるから、この系譜は普秀、或いは郭天錫によって最初に作られた可能性が高い。

「碑銘」の最後には、この碑文を撰述した縁起を述べている。がんらい元刊本『臨濟録』には從倫の序があつて、その中に雪堂普仁が「偶たま余杭に至つて」、「臨濟録」の旧本を得て、これを重刊したと言つている。この「碑銘」によれば、雪堂普仁は至元二十四年（二二八七）の春、鎮陽に行き臨濟祖師塔に参拝し、その際に祖師の遺跡に物足りなさを感じたので、僧統の満公（筆庵満）と相談して、臨濟寺に「臨濟祖師道行碑」を立てることを決めた。同年八月、普仁は皇帝の委託を受けて杭州の名刹に参拝に行く途中、広陵を経由した際、王博文と会い、彼に碑文の撰述を依頼した。普仁が余杭（現在の杭州）に行ったのは、至元二十四年秋の出来事であり、その目的は皇帝に代わつて名刹に参拝するためであつたが、まさにこの杭州への旅の折りに、意外にも『臨濟録』の旧本を入手したのである。雪堂普仁は、一方では『臨濟録』を復刻し、他方では大名と真定との二カ所に臨濟祖師の記念碑を立てた。こうした努力はいずれも『臨濟録』を広く流伝させ、人々に臨濟祖師の思想と功德を知らせるためであつた。それは臨濟宗振興の事業の一部であるとともに、元代仏教史においても一つの注目すべき事件であらう。

また「碑銘」の落款によれば、立碑の主催者は雪堂普仁であるが、他に淨慈寺の住職愚極至慧、靈隱寺の住職玉山徳珍、徑山寺の住職虎岩淨伏なども参与している。この三人は共に杭州臨濟宗の領袖であつたから、普仁が杭州で『臨濟録』の旧本を見つけたのは、恐らく彼らの協力が得られたためであらう。その後、彼らは普仁による臨濟祖師記念碑の立碑事業にも参加しており、こうした事実から、当時南北臨濟宗の間には緊密な交流と協力があつたことが分かる。

## 五、雪堂普仁は誰か

雪堂普仁は元刊本『臨濟録』刊行事業の主催者であるが、しかし彼について禅宗史書には殆ど記載がない。また彼を杭州浄慈寺の雪堂普仁(字は徳隠、一三二一—一三三五)と混同した誤解もある<sup>13)</sup>。浄慈寺の雪堂普仁は元末明初の径山師範系の禅僧であり<sup>14)</sup>、元刊本刊行の際に彼はまだ生まれていなかった。元刊本刊行を主催した雪堂普仁は元代初期の禅僧で、江淮福建等处积教総統をつとめ、皇室からも尊敬された、当時中国北方の臨濟宗において非常に活躍した人物である。この雪堂普仁の事蹟は以下のような元代の史料を通じて分かる。

まずは元代の碑文である。一つは王暉(一二二七—一三〇四)の「大元國大都創建天慶寺碑銘并序」であり<sup>15)</sup>、もう一つは李謙(号は野齋、一二三四—一三二二)の「重陽洞林寺藏經記」である<sup>16)</sup>。両碑文によれば、普仁、号は雪堂、俗姓は張、許昌(現在の河南省許昌)の人。寿峰湛のもとで剃髮し、竹林雲にしたがつて受戒し、永泰贊(西庵贊)から法を得た。早く山西に在住し、経戒の厳格と機鋒の峻烈によって、京師まで名を知られた(「名動京師」)。のち皇帝の女婿(駙馬)たる高唐郡王の招請に応じて<sup>17)</sup>、豊州(現在の内蒙古フフホト)の法蔵院に住持した。至元九年(一二七二)大都に至り、遼代の廢寺たる永泰寺の弥陀院に住し、のち晋王カマラ(甘麻剌、フビライの長孫)と高唐郡王は、普仁のために永泰寺の旧址に新たに天慶寺を建てた<sup>18)</sup>。その後、京師及び北方各地の臨濟宗の招聘に応じて、大都の開泰寺や真定の臨濟寺など一〇寺院の住職を兼任した。二十四年(一二八七)、鎮陽に立ち寄り、石碑(臨濟道行碑)を立てて祖師の行状を表した(「過鎮陽、樹碑表行」)。二十六年(一二八九)、皇孫テムルの(鉄穆耳、後の元の成宗)の命を奉じて、江蘇・浙江の名刹を礼拝し、大藏経を造った(「禮江浙名刹、起造藏經」)。その際、大藏経を新たに四部刻印

し、また二〇部の大藏経を購入して北方へ運び、各寺院にそれを送った。三十年(一二九三)、「江淮福建隆興等処釈教総統」に任じられた。普仁は「儒学をこのみ、能力と見識を持ち、交わる人はみな皇帝周辺の王侯大臣や文武の豪傑ばかり」(「喜儒學、有器識、所交皆藩維大臣、文武豪士」)であり、彼の住居において商挺・王磐など一九名の文人士大夫と集まって詩文の唱和を行ない(雪堂雅集)、当時の人々から「盧阜蓮社」と呼ばれた。つまり東晋の廬山慧遠の「白蓮社」のような信仰団体と見なされたのである<sup>19)</sup>。結局、雪堂雅集のメンバーの多くは、元刊本『臨濟録』の刊板事業の寄付者となった。二〇一四年、内蒙古包頭市において、一つの青銅鋪が発見され、そこに大徳九年(一三〇五)の銘文があった。この銘文によって、この青銅鋪は雪堂普仁が古豊州の孔子廟に奉獻した祭器であることが分かった<sup>20)</sup>。普仁は海雲印簡と同じく、儒教に対しても保護の立場をとったのである。また、雪堂普仁の生没年は不明であるが、元の元貞元年(一二九五)から延祐五年(一二二八)にかけて建てられた八つの「滎陽洞林寺聖旨碑」によれば<sup>21)</sup>、彼は元の仁宗の延祐年間(一二二四—一二三〇)にはまだ健在であり、さらに「司空」の肩書をも授けられたことが分かる。

その次の史料は、元代の惟大・鄧文原(一二五八—一二三二八)・賈汝舟などが復刻本『禪源諸詮集都序』のために書いた三本の序文である<sup>22)</sup>。この三序によれば、普仁は『臨濟録』の復刻の他に、唐代宗密の『都序』も復刻したとある。当初、普仁の師たる西庵贊が、彼に『都序』の復刻を委嘱しており、後に普仁は、雲中(現在の山西省大同)と大都でそれぞれ古本を手に入れ、校正のうえ復刻した。宗密が『都序』を書いたのは禅教を統合させるためであって、普仁も当時の仏教がそれぞれ一偏を固執する現状に不満であった。仮に彼の『臨濟録』復刻に当時の臨濟宗を統合させようとの意図があったと言える。『都序』の復刻は、さらに一歩進んで仏教の各宗を統合させるためのものであったと言えよう。仏典、特に禅籍の出版

においては、雪堂普仁は鄭州宝禪師の『頌古』と『林溪語録』とを出版し<sup>24</sup>、また柳田聖山氏によれば、雪堂普仁は、『香巖語録』・『瀉山警策』・『般若心経』なども再刊しており<sup>25</sup>、彼は禪籍の出版事業に対して特に熱情をもっていたのであろう。

要するに、普仁は当時の北方臨濟宗における事実上の中心人物であった。その学識は幅広く、儒・仏の双方に精通し、皇室貴族や文人士大夫との交誼も緊密であつて、彼を中心とする「雪堂雅集」は、元代の詩壇に重要な地位を占めている。彼は仏教經典の流布を非常に重視したので、『臨濟録』や『都序』などを復刻した。特に、『臨濟録』の復刻はこの禪籍を絶滅から救つたといつてよい。これは、『臨濟録』の流伝史において重大な意義を有する出来事である。

雪堂本の刊行年代については、史料には記載されず、椎名宏雄氏は元の大徳二年（二二九八）としており、その根拠はおそらく郭天錫の序文が同年の作成といふところにある。元刊本の刊板人の署名と彼らの伝記資料を対照すれば、彼らの署名年代が大体分かる。むろん製版と印刷は署名完了以降であることは言うまでもない。署名者のうち、忙兀台（？―一二九〇）は至元二十二年（二二八五）「江淮等処行尚書省左丞相」に任じ、五年後に逝去した<sup>26</sup>。恐らく雪堂普仁は、『臨濟録』刊行のために、早くから寄付者を募集していた。忙兀台は生前に既に寄付していたので、故に刊行の時に彼の名前が記された。他の署名はいずれも大徳三年（一二九九）年以前の肩書であり、ただ、卜憐吉尋（史書には「卜憐吉帶」ともある）は大徳十一年（一二三〇七）まで河南平章を担当したが、しかし彼の署名はもつと早かつた可能性もある。寄付者の署名がそろつと、製版がはじめて可能となり、その時期は大徳三年前後であろう。仮に卜憐吉尋の署名は大徳年間後期のものとしても、刊板年代も大徳年間の範囲内となるであろう。そうすると、椎名宏雄氏の判断は基本的に間違いないが、具体的証拠がないため、大徳二年その年とは必ずしも言えず、実際には

もう少し遅い可能性がある。ともかく雪堂本『臨濟録』は至元刊本ではなく大徳刊本である。

## 六、元刊本『臨濟録』の原型

現存の元刊本『臨濟録』は、書首に欠落があるが、しかし欠落した部分は、日本伝本のなかに保存されている。故に日本伝本を参照すれば、元刊本の原型を探索することが可能である。

日本には数多くの『臨濟録』の伝本があり、そのうち元刊本と関係が深いと見なされたものが二本ある。一つは東洋文庫所蔵本で、以前は「元槧本」とされていたが<sup>88)</sup>、現在は南宋咸淳三年（一二六七）鼓山版『古尊宿語録』の一冊と見直されている<sup>89)</sup>。筆者の対照によれば、東洋文庫所蔵の伝本と成賞堂文庫所蔵南宋本『臨濟録』、および華東師範大学所蔵南宋本『臨濟録』は、実は全く同じ版のもので、いずれも『古尊宿語録』の一冊である。もう一つは静嘉堂文庫所蔵の元応二年（一三二〇）刊本で、雪堂本（元刊本）の複製本と推測されていた。今、元刊本と対照すると、この二本はどちらも元刊本でなく、さらに、その書首には馬防序しかないので、元刊本の首部との相違は明らかである。

元刊本と実際に関係のある日本伝本は、前文にも言及した『臨濟録鈔』と『大正大藏經』本である。なぜなら、その中に元刊本の元来の内容が保存されているからである。具体的にいえば、『鈔』の書首には馬防序の前に三本の「別序」があり、すなわち從倫・郭天錫・普秀三人の序であり、書尾には王博文の「碑銘」もある。「別序」とは、馬防序に相對する言い方にはかならない。現存の元刊本にも普秀序と王博文の「碑銘」があるので、『鈔』の同じ部分は元刊本に由来していることが明らかであり、したがって、『鈔』の書

首と書尾はすべての日本伝本のなかで元刊本と一番近いものと分かる。『大正蔵』本『臨濟録』の書首にも従倫・郭天錫・普秀の三序が見える<sup>8)</sup>。その底本(石川武美記念図書館所蔵、徳富蘇峰旧蔵永享本)に、三序は雪堂普仁による「續梓流通之序」という手書きの補記があつて、それによれば、当初補記の作者は三序がそもそも元刊本の内容だと知っていたという事実が分かる。また延徳三年(一四九一)刊本『臨濟録』の手書き注釈にも、「この語録には多くの序がある」(「此録多序」とあるのは、『臨濟録』には馬防序の他に三序もあるとの意味である。その注釈は室町時代の作であるから、注の作者が当時見たテキストは三序付きのものであつたと推測される。このような構成は、まさに元刊本の原型であろう。

そうすると、元刊本の書首にはそもそも三序、即ち普秀序の前に、従倫序と郭天錫序もあつた。現存の元刊本に欠落している部分は、まさにこの二序である。当初、元刊本は日本にまで伝わっていたので、果たして三序と王博文の「碑銘」は日本伝本の中に保存されてきたのである。日本伝本に三序が揃っていることは、現存の元刊本よりも勝るところであるのみならず、元刊本の原型を探求する研究において、重要な参考資料となる。故に日本伝本は特殊な価値を有するのである。

現存の元刊本に基づき、日本伝本をも参照すると、元刊本はもともと以下の内容より構成されていたことが分かる。

1. 「臨濟慧照玄公大宗師語録序」 従倫撰
2. 「臨濟慧照玄公大宗師語録序」 郭天錫撰
3. 「臨濟慧照玄公大宗師語録序」 普秀撰
4. 「臨濟慧照玄公大宗師語録」(臨濟語録の本文、宋刊本と同じ内容) 惠然輯延沼書
5. 「大名臨濟慧照玄公大宗師碑記」 郭天錫撰



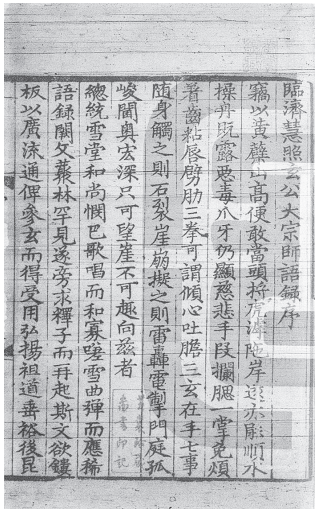
6. 「臨濟玄公大宗師真贊」 郭天錫撰
  7. 「真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘」 王博文撰
  8. 刊板人署名
- ちなみに、一部の日本伝本、例えば元禄十一年(一六九八)刊本『摘葉鈔』と享保十二年(一七二七)刊本『臨濟慧照禪師語録』との書尾の王博文「碑銘」の後ろに、元の趙孟頫の「臨濟正宗碑」も付されている。これは現存の元刊本に収められていないもので、やはり筆者が以前に推測したとおり、日本伝本の中に新たに付加されたものである。

## むすび

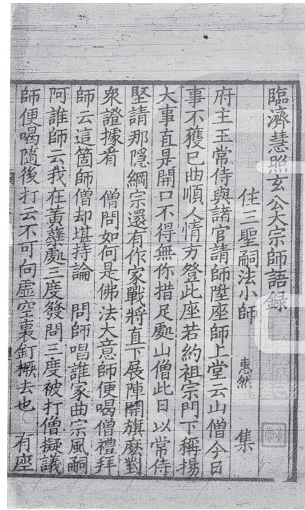
日本と比べて中国で保存されている『臨濟録』の伝本は少ない。そのため、元刊本が元代以後の中国伝本にいかなる影響をもたらしたのか、今はつきりとは分からない。これに対して、元刊本は刊行の後、早いうちに日本に伝えられたので、その結果、日本伝本『臨濟録』の祖本の一つとなった。今なお日本伝本『臨濟録』の中に、元刊本の痕跡が残っている。それは、從倫・郭天錫・普秀の三序と王博文の「碑銘」などともと元刊本に由来する文章の他に、日本伝本の書尾題記からも見える。日本伝本において、その書尾題記は三つのタイプがある。一つは、「延沼謹書」「存獎校勘」「宗演重開」など三つの題記が揃い、もう一つは、「延沼謹書」と「存獎校勘」と二つの題記があつて、また一つは、「延沼謹書」のみである。「宗演重開」の題記は、北宋宗演本に由来したものほかならない。「存獎校勘」の題記は南宋本の特徴であり、

「延沼謹書」しかないのは、元刊本の影響ではないかと思われる。一方、日本伝本の書名は、元刊本の『臨濟照玄公大宗師語録』と異なる『鎮州臨濟慧照禪師語録』であり、さらに馬防序も付いている。こういったことは、宋刊本の影響を受けた証であろう。日本伝本は宋元刊本の両方から受け入れた内容があるため、多種多様になった。『臨濟録』伝本の歴史において、元刊本のいかなる影響があったのが、日本伝本を通じて推察できるのである。

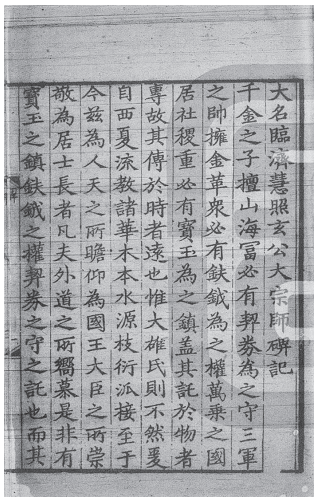
最後に、元刊本『臨濟録』の価値を考えてみよう。本書は宋元時代の刻本として、それ自体が古籍の「善本」であり、さらに有名人の收藏を経たこともあるため、やはり一般の古籍「善本」よりさらに多くの文化財的価値をもっている。また、本書は元代の『臨濟録』刊本として天下唯一の孤本であり、他に替わるものがないため、はなはだ貴重である。現存の『臨濟録』古刻本の中で本書はもっとも古い単行刊本であり、その前の北宋宗演本は既に逸失し、南宋本は『古尊宿語録』中の一冊であり、そもそもは集合本であった単行本ではない。すなわち本書は現存の宋元時代の『臨濟録』刊本において唯一の単行本である。本書の保存状態は比較的よいので、元刊本の大部分の内容がよく分かり、それに拠って元刊本の原型を探索することが可能となる。本書に収録されている普秀序は、錢良佑が書写したもので、錢氏書道の遺作である。また、郭天錫の「碑記」と「真贊」は、他の文献に見られない郭氏逸文である。もともと元刊本にあった三序と付録は、臨濟宗に関する貴重な史料であり、特に金元時代北方臨濟宗の研究において重要な参考価値をもっている。元刊本はかつて日本に伝わり、以降の日本伝本に深い影響をもたらした。故にこのテキストを通じて、日本伝本と中国祖本との関係、また日中仏教交流史の様々な関係を具体的に把握することができる。総じて元刊本『臨濟録』は貴重な文化財であると同時に、重要な仏教史の研究資料であり、重視に値するものである。



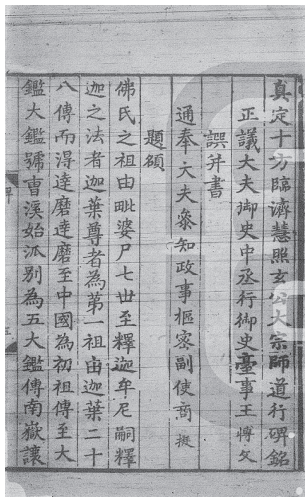
譜秀序



臨濟語錄本文



郭天錫の「碑記」



王博文の「碑銘」

付録1 元刊本『臨濟録』影印(中国国家図書館蔵)



- (1) 繆荃孫・吳昌綬・董康『嘉業堂藏書志』、復旦大学出版社(上海)、一九九七年、第四八六～四八七頁。
- (2) 『鈔』は日本嘉曆四年(一二三九)刊本に施された漢文による注釈で、寛永七年(一六三〇)刊本。柳田聖山編『臨濟録抄書集成』上(中文出版社、一九八〇年)に収める。
- (3) 陸川堆雲『臨濟及臨濟録の研究』、喜久屋書店(東京)、一九四九年、第一頁。
- (4) 明の盧熊『蘇州府志』卷三八「人物・文藝」参照。明洪武十二年(一三七九)抄本。
- (5) 「杲」、原文は「果」であるが今改めた。
- (6) 陸川堆雲『臨濟録詳解』参照。真禪研究会(長野)、一九五九年、第二三～三一頁。
- (7) 宗典「辨郭昇非郭祐之及其偽畫」参照。『文物』一九六五年第八期。郭天錫と郭昇との生没年については、宗典氏はそれぞれ一二四八～一三〇二と一二二八〇～一三三五としているが、ここでは現在通行の説を採用する。
- (8) 『摘葉鈔』には影印本があり、柳田聖山編『臨濟録抄書集成』下に収める。享保本は原刊本の他に、新印本の『無著道忠校訂臨濟禪師語録』がある(臨濟禪師奉讚会刊行、一九六七年)。
- (9) 劉友恒・李秀婷「真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘」浅談」参照。『文物春秋』二〇〇七年第五期。
- (10) 張国清・貢俊録・劉友恒「元代臨濟寺〈寓庵堅公禪師寿塔〉銘考」参照。『文物春秋』二〇一五年第四期。
- (11) 劉友恒・李秀婷「真定十方臨濟慧照玄公大宗師道行碑銘」浅談」参照。
- (12) 野斎(李謙)「重陽洞林寺藏經記」参照。蔡美彪『元代白話碑集録』、科学出版社(北京)、一九五五年、第一二〇～一二二頁。
- (13) 椎名宏雄編『五山版中国禅籍叢刊』第六卷参照、臨川書店(京都)、二〇一六年、第五九八～五九九頁。

- (14) 明の宋濂『護法録』巻二「浄慈山報恩光孝禪寺住持仁公塔銘」、明の明河『補續高僧伝』巻一五、明の朱時恩『佛祖綱目』巻四一「徳隱普仁禪師入寂」条、清の超永『五燈全書』巻五八などを参照せよ。
- (15) この碑銘は『秋澗集』巻五七(『全元文』第六冊、江蘇古籍出版社、一九九八年、第四九二～四九四頁)に収める。作者の王惲については『元史』巻一六七本伝参照。
- (16) 蔡美彪『元代白話碑集録』参照、第一二〇～一二二頁。作者の李謙、号は野齋、『元史』巻一六〇本伝参照。
- (17) 蒙元時期、武将アラクシーデイギドークリ(阿剌兀思剔吉忽里)の家族は、前後して複数の人が高唐王に封ぜられた。この高唐郡王は、恐らくボヤオカイ(李要合)を指している。彼は早く西域を征し、後に北平王に封ぜられ、チンギス・カン(成吉思汗)の三女アラカイ・ベキ(阿剌海別吉)と結婚、死後高唐郡王として追認された。
- (18) 天慶寺旧址は現在の北京市内東曉市街のあたりに位置している。
- (19) 雪堂普仁と士大夫との交遊について、王惲の「雪堂上人集類諸名公雅制序」にも、「雪堂上人、禪悅餘暇、樂從賢士夫遊、諸公亦賞其爽朗不凡、略去藩籬、與同形跡、以道義定交、文雅相接」(『秋澗先生大全集』巻四三)と記している。
- (20) 「包头燕家梁遗址发现元代祭孔铜器刻文总统一」铭文」参照、二〇一四年五月二〇日『内蒙古日報』。
- (21) 蔡美彪『元代白話碑集録』参照、第三六～七四頁。
- (22) 三序とも『大正蔵』第四八冊参照、第三九七頁b～三九八頁b。
- (23) 元の従倫「洞林大覚禪寺第一代西堂宝公大宗師頌古序」・「洞林大覚禪寺第一代西堂宝公大宗師林溪録序」参照、『全元文』第二〇冊、江蘇古籍出版社(南京)、二〇〇〇年、第五一五～五一六頁。

- (24) 柳田聖山『臨濟録の研究』参照、法蔵館(京都)、二〇一七年、第一六六〜一六七頁。
- (25) 『元史』 卷一三二 本伝参照。
- (26) 椎名宏雄『宋元版禪籍の研究』参照、大東出版社(東京)、一九九三年、第五九八頁。
- (27) 椎名宏雄編『五山版中国禪籍叢刊』第六卷参照、第五九八頁。
- (28) 『大正蔵』本の三序は、その底本においては、手書きで補写したものである。

**\*** 本論文は日本学術振興会基金による課題研究成果の一部である。課題番号…JSPS科研費26730045。本稿に取り上げた問題について、衣川賢次先生から貴重なご教示と参考資料のご提示を賜り、ここに深謝いたします。

